

令和 8 年 8 月 28 日 地震調査研究推進本部 地震調査委員会
--

集福寺断層の長期評価（一部改訂）

集福寺（しゅうふくじ）断層は、福井県敦賀市市橋（いちはし）から滋賀県長浜市西浅井町野坂（にしあざいちょうのざか）に至る活断層である。ここでは、活断層研究会編（1991）、岡田・東郷編（2000）、岡田ほか（2005）などに基づいて、この断層の諸特性を次のように評価した。^{※1}

1. 集福寺断層の位置及び形状

集福寺断層は、福井県敦賀市市橋から滋賀県長浜市西浅井町野坂に至る断層である。長さは約 10 km で、北西－南東方向に延びており、左横ずれを主体とする断層である（図 1、図 2、表 1）。

2. 断層の過去の活動

集福寺断層の過去の活動に関する資料は得られていない。

3. 断層の将来の活動

集福寺断層では、マグニチュード（M）6.5 程度の地震が発生する可能性があり、約 1 m の左横ずれが生じる可能性がある（表 1）。集福寺断層の将来における地震発生の可能性は不明である（表 2）（注 1、注 2）。

4. 今後に向けて

集福寺断層は長さが約 10 km で比較的規模の小さな断層ではあるが、過去の活動に関する資料はほとんど得られていないため、最新活動時期や平均活動間隔を特定するための資料を得る必要がある。

^{※1}集福寺断層については、地震調査研究推進本部地震調査委員会（2003）により、それまでに行われた調査結果に基づいて野坂・集福寺断層帯として長期評価が公表されているが、その後に行われた調査及び研究成果により、断層帯を構成する断層の位置・形状や活動履歴に関する新たな知見が得られた。ここでは、震源分布図を除いて、2018 年までに公表された調査研究成果による知見に加え、周辺の重力異常や地下構造などの検討に基づき、野坂・集福寺断層帯を野坂断層帯と集福寺断層に二分し、それぞれ評価を行うこととした。なお、今回の評価に際しては、必ずしも 2018 年までに公表されたすべての調査研究成果を網羅しているわけではないことに留意されたい。

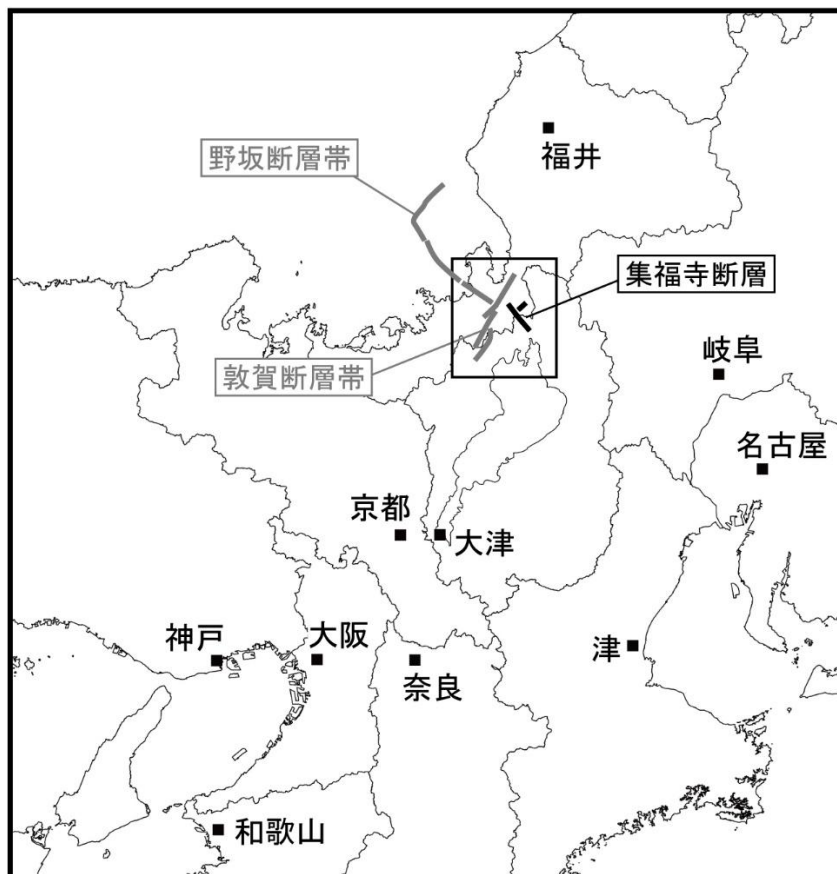


図1 集福寺断層と周囲の断層帯の位置関係概略図
(長方形は図2の範囲)

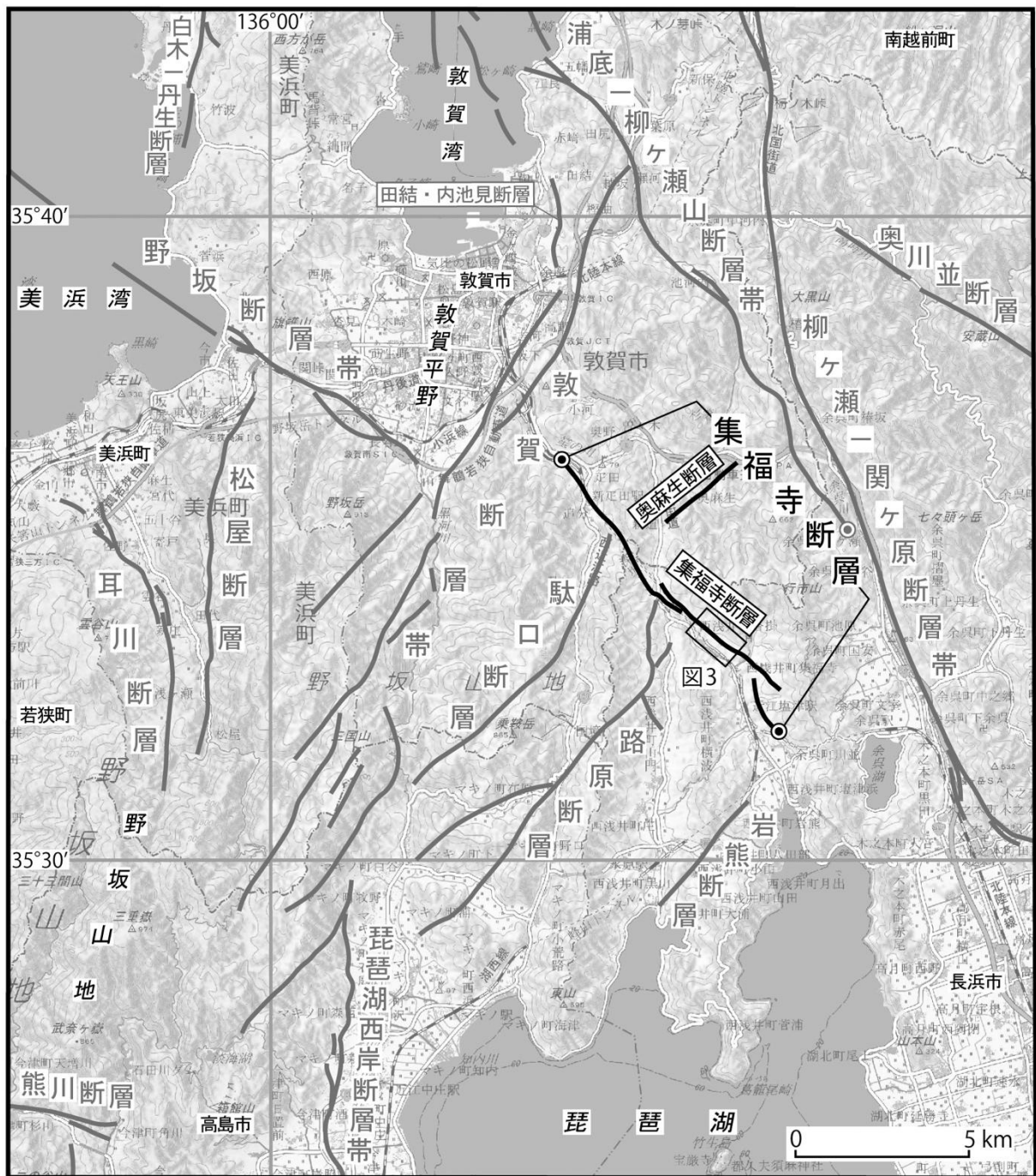


図2 集福寺断層の活断層位置と主な調査地点

●：断層の北西端と南東端 長方形は図3の範囲
活断層の位置は文献1－3に基づく。

基図は国土地理院発行数値地図 20 万「岐阜」及び「宮津」を使用。

表 1 集福寺断層の特性

項 目	特 性	信頼度 (注 3)	根 拠 (注 4)
1. 断層の位置・形態			
(1) 構成する断層	集福寺断層、奥麻生（おくあそう）断層		
(2) 断層の位置・形状	地表における断層の位置・形状 断層の位置 （北西端）北緯 35° 36.3′ 東経 136° 5.5′ （南東端）北緯 35° 32.0′ 東経 136° 9.7′ 長さ 約 10 km 一般走向 N38° W 地下における断層面の位置・形状 上端の深さ 0 km 傾斜 ほぼ垂直（地表近傍） 下端の深さ 15 km 程度 断層面の幅 15 km 程度 断層面の長さ 不明	○ ○ ○ ◎ ○ △ △ —	文献 1－3 による。数値は図 2 から計測。形状は図 2 を参照。 一般走向は断層の北西端と南東端を直線で結んだ方向（図 2 参照）。 地形の特徴から推定。 地形の特徴から推定。 地震活動（D100）から推定。（注 5） 断層面の傾斜と下端の深さから推定。
(3) 断層のずれの向きと種類	左横ずれ断層（上下成分を伴う）	◎	文献 2 などによる。
2. 断層の過去の活動	活動度が B 級であると推定される以外は不明		文献 2 などによる。
3. 断層の将来の活動			
(1) 将来の活動区間及び活動時の地震の規模	活動区間 断層全体で 1 区間 地震の規模 M6.5 程度 ずれの量 約 1 m（左横ずれ成分）	○ ▲ △	断層の位置関係・形状などから推定。 断層の長さから推定。（注 6） 断層の長さから推定。

表2 集福寺断層の将来の地震発生確率等

項 目	将来の地震発生確率等（注7）	信頼度（注8）	備 考
地震後経過率（注9）	Xランク 不明		
今後30年以内の地震発生確率	不明	—	発生確率及び集積確率は文献4による。
今後50年以内の地震発生確率	不明		
今後100年以内の地震発生確率	不明		
今後300年以内の地震発生確率	不明		
集積確率（注10）	不明		

注1：地震調査委員会の活断層評価では、将来の活動区間が単独で活動した場合の今後30年間の地震発生確率について、次のような相対的な評価を盛り込むこととしている。

今後30年間の地震発生確率（最大値）が3%以上の場合：

「本断層帯は、今後30年の間に地震が発生する可能性が、我が国の主な活断層の中では高いグループに属することになる」

今後30年間の地震発生確率（最大値）が0.1%以上－3%未満の場合：

「本断層帯は、今後30年の間に地震が発生する可能性が、我が国の主な活断層の中ではやや高いグループに属することになる」

なお、2005年4月時点でひととおり評価を終えた98の主要活断層帯のうち、最新活動時期が判明しており、通常の活断層評価で用いている更新過程（地震の発生確率が時間とともに変動するモデル）により地震発生長期確率を求めたものについては、将来の活動区間が単独で活動した場合の今後30年間に地震が発生する確率の割合は以下のとおりになっている。

30年確率の最大値が0.1%未満：約半数

30年確率の最大値が0.1%以上－3%未満：約1/4

30年確率の最大値が3%以上：約1/4

（いずれも2005年4月時点での算定。確率の評価値に幅がある場合はその最大値を採用。）

注2：1995年兵庫県南部地震（地震調査研究推進本部地震調査委員会、2026a）、1858年飛越地震（地震調査研究推進本部地震調査委員会、2004）及び1847年善光寺地震（地震調査研究推進本部地震調査委員会、2015）の地震発生直前における30年確率と集積確率は以下のとおりである。

地震名	活動した活断層	地震発生直前の30年確率（%）	地震発生直前の集積確率（%）	断層の平均活動間隔（千年）
1995年兵庫県南部地震（M7.3）	六甲・淡路島断層帯 淡路島西岸区間 「野島断層を含む区間」 （兵庫県）	0.02%－10%	0.05%－90%	約1.6－約3.5
1858年飛越地震（M7.0－7.1）	跡津川断層帯 （岐阜県・富山県）	ほぼ0%－13%	ほぼ0%－90%より大	約1.7－約3.6
1847年善光寺地震（M7.4）	長野盆地西縁断層帯 （長野県）	ほぼ0%－20%	ほぼ0%－90%より大	約0.8－約2.5

「長期的な地震発生確率の評価手法について」（地震調査研究推進本部地震調査委員会、2001）に示されているように、地震発生確率は前回の地震後、十分長い時間が経過しても100%とはならない。その最大値は平均活動間隔に依存し、平均活動間隔が長いほど最大値は小さくなる。平均活動間

隔が2千年の場合は30年確率の最大値は12%程度である。

注3：信頼度は、特性欄に記載されたデータの相対的な信頼性を表すもので、記号の意味は次のとおり。

◎：高い、○：中程度、△：低い、▲：かなり低い

注4：文献については、本文末尾に示す以下の文献。

文献1：活断層研究会編（1991）

文献2：岡田・東郷編（2000）

文献3：岡田ほか（2005）

文献4：地震調査研究推進本部地震調査委員会（2001）

注5：主要活断層の評価の中では、断層面の下端の深さは、地震観測結果から推定される地震発生層の下限の深さに基づいて推定を行っている。2016年に発生した熊本地震の例では、本震のすべり領域が、上記の方法で推定していた断層面の下端の深さよりもさらに5km程度深い場所まで延びていた可能性が指摘された（例えば、Asano and Iwata, 2016；気象庁, 2016）。そのため、地震の際に実際に活動しうる断層面の下端は、推定された断層面の下端に対して5km程度深くなる可能性があることに留意されたい（地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会, 2026）。

注6：松田（1975）による経験式（ $\log L = 0.6M - 2.9$ ）より推定。ただし、長さ20 km未満の活断層には適用できない可能性があるため、ここでは信頼度を▲とした。

注7：評価時点は2026年1月1日現在。「ほぼ0%」は $10^{-3}\%$ 未満の確率値を示す。

注8：地震発生確率等の評価の信頼度に関する各ランクの分類条件の詳細は以下のとおりである。

ランク	分類条件の詳細
a	発生確率を求める際に用いる平均活動間隔及び最新活動時期の信頼度がいずれも比較的高く（◎または○）、これらにより求められた発生確率等の値は信頼性が高い。
b	平均活動間隔及び最新活動時期のうち、いずれか一方の信頼度が低く（△）、これらにより求められた発生確率等の値は信頼性が中程度。
c	平均活動間隔及び最新活動時期の信頼度がいずれも低く（△）、これらにより求められた発生確率等の値は信頼性がやや低い。
d	平均活動間隔及び最新活動時期のいずれか一方または両方の信頼度が非常に低く（▲）、発生確率等の値は信頼性が低い。このため、今後の新しい知見により値が大きく変わる可能性が高い。または、データの不足により最新活動時期が十分特定できていないために、現在の確率値を求めることができず、単に長期間の平均値を確率としている。

注9：最新活動（地震発生）時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔に達すると1.0となる。

注10：前回の地震発生から評価時点までに地震が発生しているはずの確率。

(説明)

1. 集福寺断層に関するこれまでの主な調査研究

本断層の位置は、伊藤・藤田(1971)、東郷・仲川(1973)、岡田(1973)、東郷(1974)、村井・金子(1975)、松田ほか(1976)、垣見ほか(1978)、武藤ほか(1981)、活断層研究会編(1991)、岡田・東郷編(2000)、中田・今泉編(2002)、岡田ほか(2005)、今泉ほか編(2018)などによって示されている。東郷・仲川(1973)や東郷(1974)は、集福寺断層南部の滋賀県長浜市西浅井町沓掛付近における変位地形から、本断層は北西－南東方向に延びる左横ずれ断層であるとした。2003年には、それまでの調査や研究成果に基づいて、本断層の北西に位置する野坂断層帯と合わせ、野坂・集福寺断層帯として本断層の長期評価が公表されている(地震調査研究推進本部地震調査委員会, 2003)。

2. 集福寺断層の評価結果

集福寺断層は福井県敦賀市市橋から滋賀県長浜市西浅井町野坂にかけて、北西－南東方向に延びる断層である。集福寺断層と、その北西に分布する野坂断層帯は、約4 km離れており、この区間には、北東－南西方向に敦賀断層帯が延びている(図1)。敦賀断層帯の北東部に位置する敦賀断層は、更新統堆積以降活動していない可能性が指摘されていた(杉山ほか, 1998)。一方、柳ヶ瀬－関ヶ原断層帯・浦底－柳ヶ瀬山断層帯(地震調査研究推進本部地震調査委員会, 2026b)の一部である田結・内池見断層は、過去数万年間に複数回活動したことが指摘されており(山田ほか, 2015)、田結・内池見断層が敦賀断層の北端と近接していることから、敦賀断層の更新世以降の活動性は否定できないと判断した。ここでは、敦賀断層帯が野坂断層帯と集福寺断層を切ってさらに北東に延びていると判断し、地下構造や重力異常などを考慮した結果、野坂断層帯と集福寺断層をそれぞれ独立の起震断層として評価することとした。

2. 1 集福寺断層の位置・形態

(1) 集福寺断層を構成する断層

集福寺断層は、野坂山地(湖北山地ともいう)の南東部に位置しており、福井県敦賀市市橋から滋賀県伊香郡西浅井町野坂にかけて分布している。

集福寺断層は、野坂断層帯の南東端から約4 km左ステップして概ね北西－南東方向に延びているが、南端付近では分岐した短い断層が並走する。また、本断層から東に1.5 km程度離れた敦賀市奥麻生付近には、奥麻生断層が北東－南西方向に延びる。岡田・東郷編(2000)によると、奥麻生断層は長さ約2.5 km程度の確実度Ⅱの右横ずれ断層とされており、活断層図(都市圏活断層図)「敦賀」(岡田ほか, 2005)においても実在する右横ずれ活断層として描かれている。しかし、奥麻生断層については、過去の活動などの詳細が不明であることから、ここでは存在について述べるに留める。

活断層の位置及び名称は、活断層研究会編(1991)、岡田・東郷編(2000)、中田・今泉編(2002)、岡田ほか(2005)及び今泉ほか編(2018)によった。

(2) 断層面の位置、形状

集福寺断層の両端を直線で結ぶと、長さは約10 km、一般走向はN38° Wとなる。断層の傾斜は明らかではないが、後述のようにこの断層は左横ずれを主体としており、断層の地表トレースが直線的であることから、地表付近ではほぼ垂直であると推定される。この傾斜が地下深部まで続いているとすれば地震発生層の深さの下限から、断層面の幅は15 km程度の可能性がある。

(3) 断層の変位の向き(ずれの向き)(注11)

集福寺断層は、東郷(1974)などに示された変位地形(図3)などから、左横ずれを主体とし、上下成分を伴うと考えられる。ただし、岡田・東郷編(2000)によれば相対的な隆起の方向は場所により異なる。

2. 2 集福寺断層の過去の活動

(1) 平均変位速度(平均的なずれの速度)(注11)

集福寺断層の平均変位速度に関する直接的な資料は得られていない。なお、活断層研究会編（1991）、岡田・東郷編（2000）によると、周辺に分布する段丘面にみられる変位から、集福寺断層の活動度をB級（1,000年あたりの平均的なずれの量が0.1m以上1m未満）としている。

（2）活動時期

周辺に分布する段丘面に変位がみられることから、第四紀に繰り返し活動していることは確実であると考えられるが、集福寺断層の過去の活動時期に関する直接的な資料は得られていない。

（3）1回の変位量（ずれの量）（注11）

集福寺断層の1回の活動に伴う変位量に関する直接的な資料は得られていない。ただし、本断層は長さが約10kmであることから、以下の経験式（1）、（2）によると活動時の地震規模はマグニチュード6.5程度（注6）で、変位量は約1mと求まる。ただし、過去の活動に関する資料が得られていないことから、将来における地震発生の可能性は不明である。用いた経験式は松田（1975）、松田ほか（1980）による次の式である。ここで、Lは断層の長さ（km）、Mはマグニチュード、Dは1回の活動に伴う変位量（m）である。

$$\text{Log } L = 0.6M - 2.9 \quad (1)$$

$$D = 10^{-1} L \quad (2)$$

（4）活動間隔

本断層の活動間隔に関する直接的な資料は得られていない。

（5）活動区間

本断層の活動区間に関する直接的な資料は得られていないが、断層の位置・形状からは全体が1つの起震断層を構成しているとみることができることから、ここでは全体が1つの区間として活動したと推定する。

（6）測地観測結果

集福寺断層周辺における、最近5年間及び2012年からの10年間のGNSS観測結果では、西北西－南南東方向の縮みが見られる（図4－1、図4－2）。また、1994年までの約100年間の測地観測結果では、東西方向ないし西北西－南南東方向の縮みが見られる（図4－3）。

（7）地震観測結果

2022年12月までの20年間の地震観測結果によれば、集福寺断層付近では、散発的にM3.0未満の地震が発生するのみで地震活動は低調である（図5）。本断層付近の地震発生層の下限は15km程度である（図6）。1919年以降、本断層付近では、M5.0以上の地震は発生していない。

2. 3 集福寺断層の将来の活動

（1）将来の活動区間及び地震の規模

集福寺断層は、断層全体が1つの活動区間として活動すると推定される。断層の長さは約10kmであることから、経験式（1）を用いると、発生する地震の規模はM6.5程度と推定される（注6）。また、経験式（2）を用いると、その際に約1mの左横ずれが生じる可能性がある。

（2）地震発生の可能性

本断層では、過去の活動に関する資料が得られていないため、将来の地震発生の可能性は不明である。

3. 今後に向けて

集福寺断層は、平均変位速度、最新活動時期や平均活動間隔など過去の活動に関する資料が無く、将来の地震発生確率が不明であることから、過去の活動に関する精度の高い資料を得る必要がある。

また、本断層を含む近畿地方北部にはいくつかの活断層が近接して分布していることから、本

断層が周辺の断層帯と連動して活動する可能性など、相互の関係について今後、調査・研究を進めていく必要がある。

注 11：本文及び表 1 では、「変位」を一般的にわかりやすいように「ずれ」という言葉で表現している。ここでは専門用語である「変位」が本文及び表 1 の「ずれ」に対応するものであることを示すため、両者を併記した。なお、活断層の専門用語では、「変位」は切断を伴う「ずれ」の成分と切断を伴わない「撓（たわ）みの成分」よりなる。

文 献

- Asano, K. and Iwata, T. (2016): Source rupture processes of the foreshock and mainshock in the 2016 Kumamoto earthquake sequence estimated from the kinematic waveform inversion of strong motion data. *Earth Planets Space*, **68**:147, doi:10.1186/s40623-016-0519-9.
- 今泉俊文・宮内崇裕・堤 浩之・中田 高編 (2018): 「活断層詳細デジタルマップ [新編]」. 東京大学出版会, USB メモリー・141p.
- 伊藤英文・藤田和夫 (1971): 西南日本の第四紀地殻変動から導かれた地殻の流動. *材料*, **20**, 190-196.
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2001): 「長期的な地震発生確率の評価手法について」. 46p.
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2003): 「野坂・集福寺断層帯の評価」. 19p.
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2004): 「跡津川断層帯の評価」. 28p.
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2015): 「長野盆地西縁断層帯（信濃川断層帯）の長期評価（一部改訂）」. 34p.
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2026a): 「六甲・淡路島断層帯の長期評価（一部改訂）」. 54p.
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2026b): 「柳ヶ瀬－関ヶ原断層帯・浦底－柳ヶ瀬山断層帯の長期評価（一部改訂）」. 61p.
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会 (2026): 「「活断層の長期評価手法（暫定版）」報告書（追補 1）」. 4p.
- 垣見俊弘・衣笠善博・加藤碩一 (1978): 日本活断層図. 1:2,000,000 地質編集図, no. 18, 地質調査所.
- 活断層研究会編 (1991): 「新編日本の活断層—分布図と資料—」. 東京大学出版会, 437p.
- 気象庁 (2016): 2016 年 4 月 16 日熊本県熊本地方の地震—近地強震波形による震源過程解析（暫定）—. <https://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/sourceprocess/event/2016041601250547near> (2018 年 7 月確認) .
- Matsubara, M., Ishiyama, T., No, T., Uehira, K., Mochizuki, M., Kanazawa, T., Takahashi, N. and Kamiya, S. (2022): Seismic velocity structure along the Sea of Japan with large events derived from seismic tomography for whole Japanese Islands including reflection survey data and NIED MOWLAS Hi-net and S-net data. *Earth Planets Space*, **74**:171, doi: 10.1186/s40623-022-01724-0.
- 松田時彦 (1975): 活断層から発生する地震の規模と周期について. *地震*, 第 2 輯, **28**, 269-283.
- 松田時彦・岡田篤正・藤田和夫 (1976): 日本の活断層分布図およびカタログ. *地質学論集*, no. 12, 185-198.
- 松田時彦・山崎晴雄・中田 高・今泉俊文 (1980): 1896 年陸羽地震の地震断層. *地震研究所彙報*, **55**, 795-855.
- 村井 勇・金子史朗 (1975): 琵琶湖周辺の活断層系. *地震研究所彙報*, **50**, 93-108.
- 武藤 章・豊蔵 勇・松浦一樹・池戸正行 (1981): 活断層調査の例—柳ヶ瀬断層. *応用地質*, **22**, 32-51.
- 中田 高・今泉俊文編 (2002): 「活断層詳細デジタルマップ」. 東京大学出版会. DVD-ROM 2 枚・付

- 図1葉・60p.
- 岡田篤正（1973）：中央構造線の第四紀断層運動について．杉山隆二編，中央構造線，東海大学出版会，49-86.
- 岡田篤正・今泉俊文・熊原康博・千田 昇・東郷正美・中田 高（2005）：1:25,000 都市圏活断層図「敦賀」．国土地理院技術資料D 1-No. 449.
- 岡田篤正・東郷正美編（2000）：「近畿の活断層」．東京大学出版会，395pp. + 付図4 図葉.
- 杉山雄一・吉岡敏和・寒川 旭・佐竹健治（1998）：敦賀断層の活動履歴調査．地質調査所速報，no. EQ/98/1（平成9年度活断層・古地震研究調査概要報告書），101-112.
- 東郷正美（1974）：琵琶湖北岸・野坂山地の変動地形．地理学評論，**47**，669-683.
- 東郷正美・仲川信一（1973）：湖北における河川争奪．法政大学地理学集報，2，9-19.
- 山田圭太郎・加藤茂弘・岡田篤正・石村大輔（2015）：福井県敦賀市内池見における池見断層の地下形状と活動性．活断層研究，42，55-71.

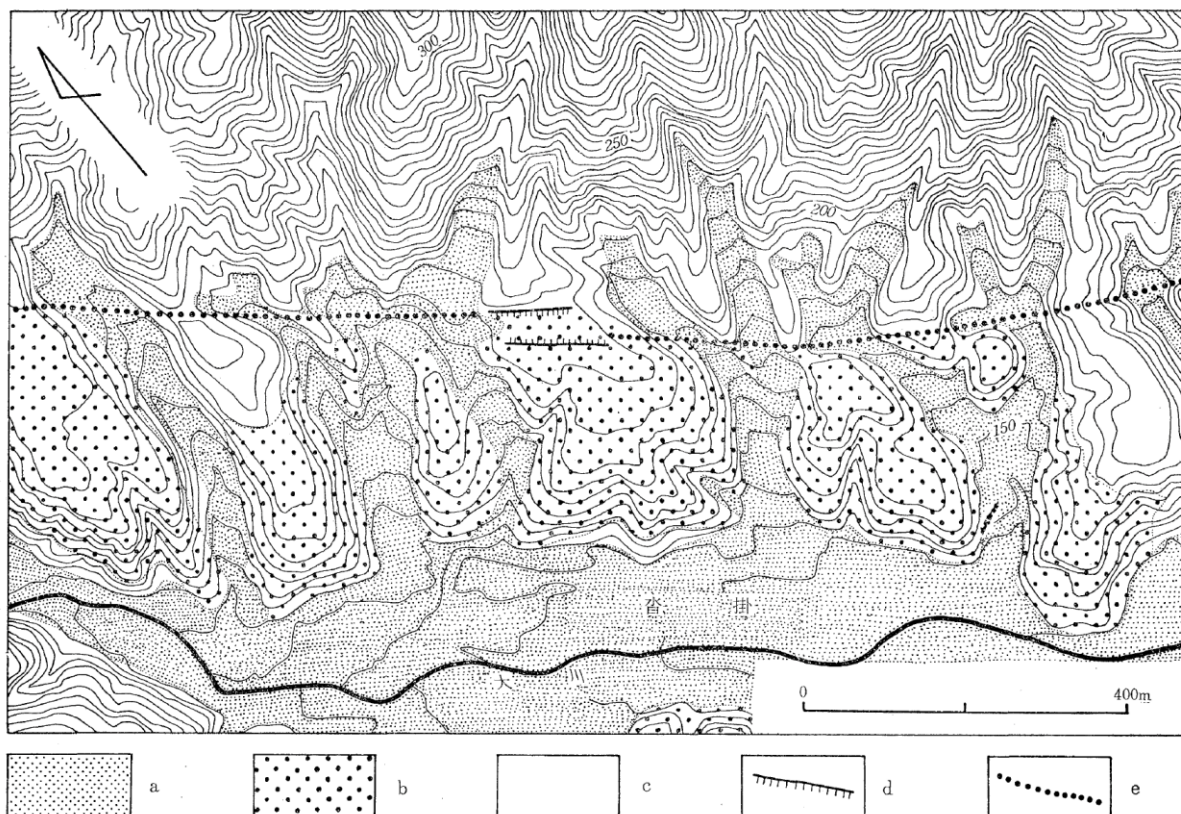


図3 滋賀県長浜市西浅井町沓掛付近の集福寺断層の地形と地質（東郷，1974）。
a：沖積層及び低位段丘堆積物、b：沓掛砂礫層、c：花崗岩類、d：低断層崖、e：リニアメント

基準期間：2017-12-01 -- 2018-01-01
比較期間：2022-12-01 -- 2023-01-01

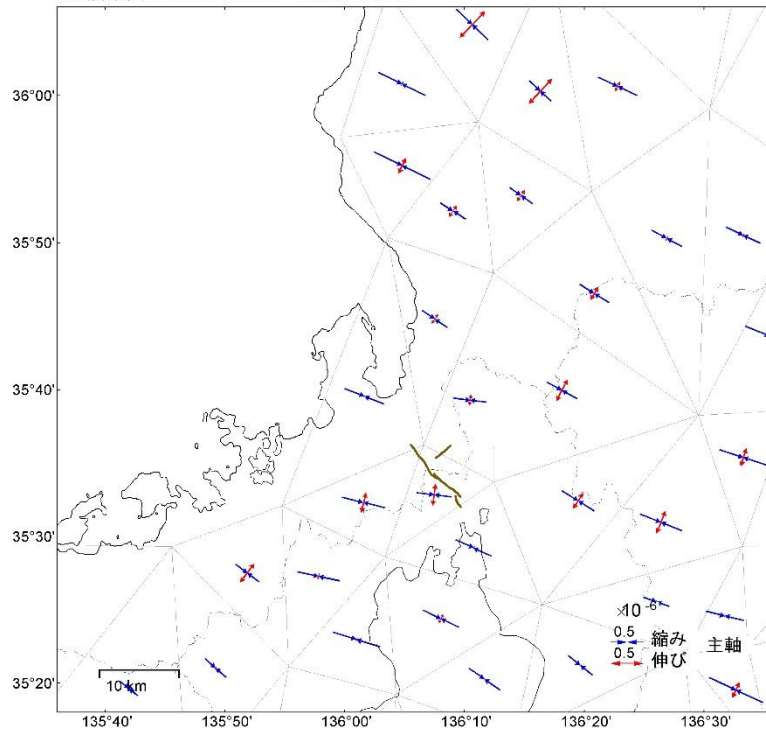


図 4－1 2017 年 12 月から 5 年間の GNSS 連続観測による集福寺断層周辺における水平ひずみ分布（国土地理院作成）。スケールは 0.5×10^{-6} 。

基準期間：2012-12-01 -- 2013-01-01
比較期間：2022-12-01 -- 2023-01-01

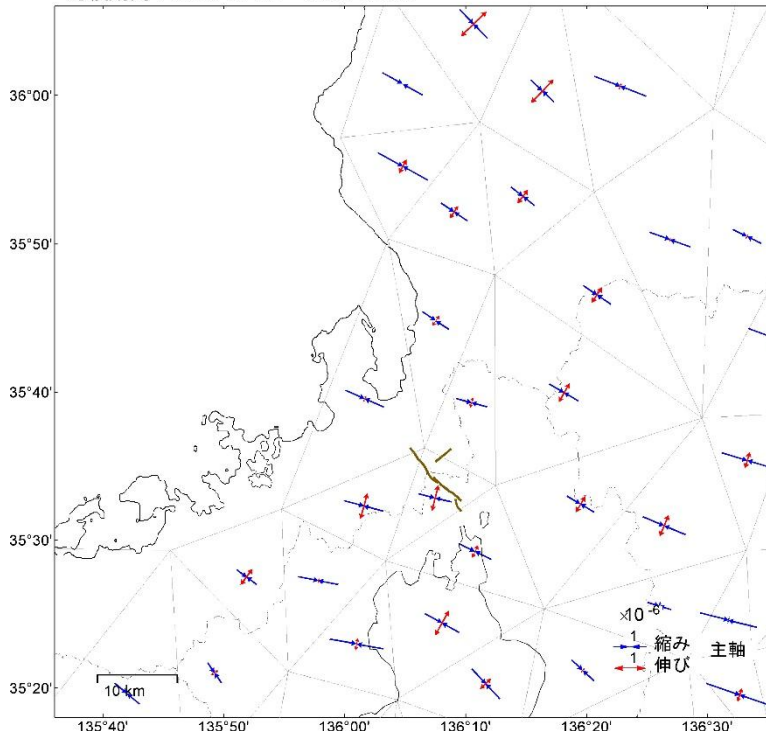


図 4－2 2012 年 12 月から 10 年間の GNSS 連続観測による集福寺断層周辺における水平ひずみ分布（国土地理院作成）。スケールは 1×10^{-6} 。

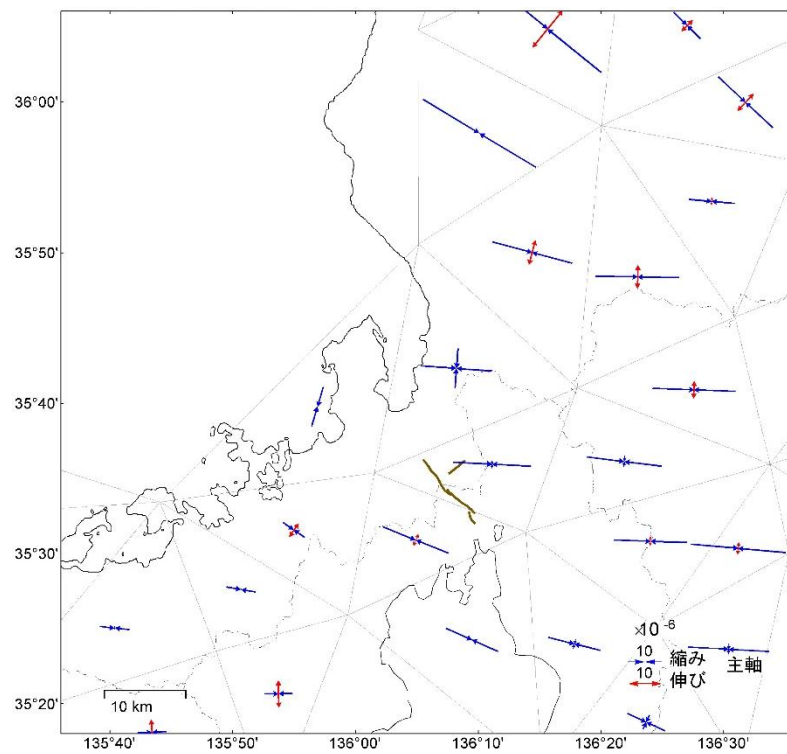


図 4－3 1883 年 1 月から 1994 年 1 月までの約 100 年間の測地観測による集福寺断層周辺における水平ひずみ分布（国土地理院作成）。スケールは 10×10^{-6} 。

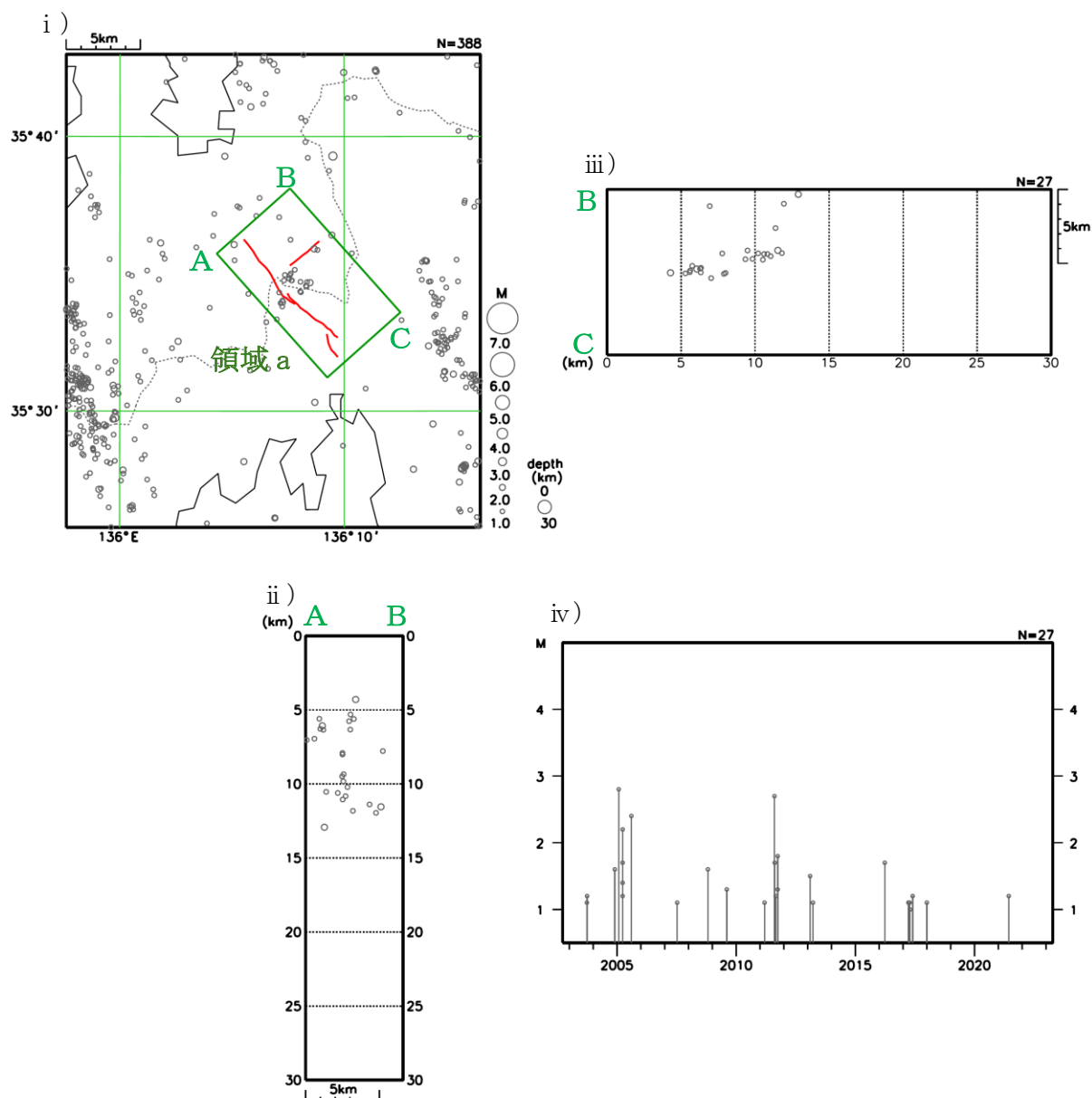


図5 集福寺断層周辺の地震活動（気象庁作成）

- i) 震央分布図（2003年1月1日～2022年12月31日、深さ30 km以浅、M1.0以上）
- ii) i) の領域 a 内のA－B断面図
- iii) i) の領域 a 内のB－C断面図
- iv) i) の領域 a 内のM－T図（地震活動経過図）

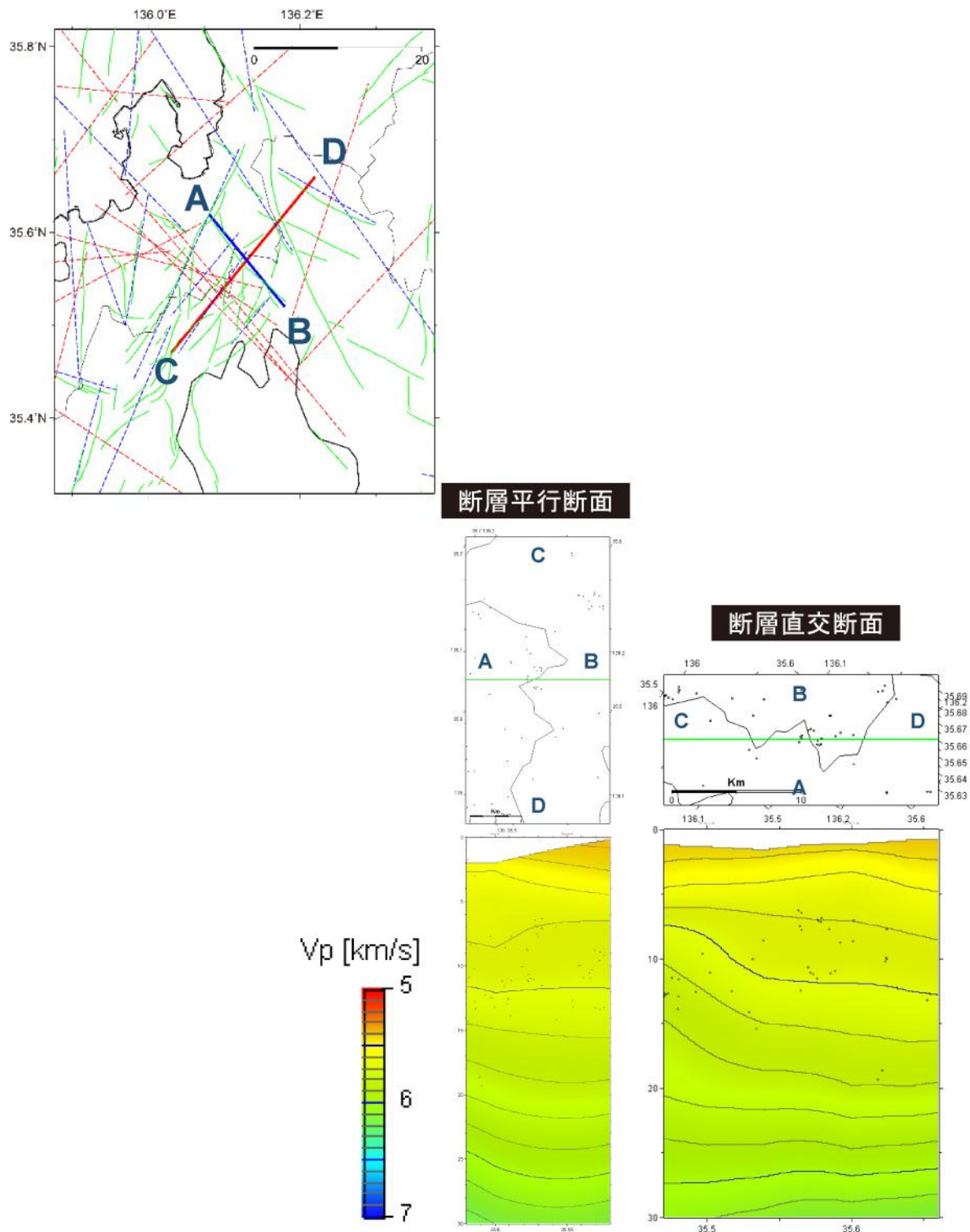


図6 集福寺断層周辺の地震活動

(作成：防災科学技術研究所・松原 誠氏)

集福寺断層で発生したM1.5以上の手動再検済みの地震について、3次元地震波速度構造 (Matsubara *et al.*, 2022) を使用して再決定した震源分布を、P波速度構造図 (Matsubara *et al.*, 2022) 上に描画している。なお、対象とした地震は、本断層を中心として、断層平行方向には断層長に±15 km、断層直交方向には断層長と同程度の長さの矩形の範囲において、2000年10月1日から2022年12月31日の期間に発生したものとした。

＜付録＞

集福寺断層については、地震調査研究推進本部地震調査委員会（2003）により、それまでに行われた調査結果に基づいて野坂・集福寺断層帯として長期評価が公表されているが、その後に行われた調査及び研究成果により、断層帯を構成する断層の位置・形状や活動履歴に関する新たな知見が得られた。こうした知見に加え、周辺の重力異常や地下構造などの検討に基づき、野坂・集福寺断層帯を野坂断層帯と集福寺断層に二分し、それぞれ評価を行うこととした。

以下に、集福寺断層の長期評価の改訂となった主な項目について、前回の評価と今回の評価の対比表を示す。なお、新たな知見が得られていない部分に関しては、原則、従前の評価を踏襲したものとなっていることに留意されたい。また、評価に当たっては、下表に示す数値のほか、各値を求めた根拠についても改訂していることに留意されるとともに、その詳細については評価文を参照されたい。

集福寺断層の長期評価についての新旧対比表^{※2}

項 目	前回の評価 (平成 15 年 6 月 11 日)	今回の評価 (令和 8 年 1 月 1 日時点)
断層帯の位置・形状	断層の位置 (北西端) 北緯 35° 36′ 東経 136° 6′ (南東端) 北緯 35° 32′ 東経 136° 10′ 一般走向 N40° W	断層の位置 (北西端) 北緯 35° 36.3′ 東経 136° 5.5′ (南東端) 北緯 35° 32.0′ 東経 136° 9.7′ 一般走向 N38° W
断層の将来の活動	ずれの量 約 0.8m (左横ずれ成分)	ずれの量 約 1 m (左横ずれ成分)

対比表に示した（◎、○、△、▲）については信頼度を示す。詳細については、注 3 を参照のこと。

^{※2} 変更が生じた項目のうち、代表的なもののみ表示。